

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2022

課題番号：26870182

研究課題名(和文)黒川能の音楽技法に見られる五流との影響関係に関する研究

研究課題名(英文)A Study of the Influence of the Five Schools on the Musical Techniques of Kurokawa Noh

研究代表者

柴田 真希 (Shibata, Maki)

東京藝術大学・大学院音楽研究科・研究員

研究者番号：60721214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：黒川能の謡本に関しては、中央の観世流や宝生流の謡本を朱で訂正して用いられていることが指摘されてきたが、昭和42年以降、謡本に関するまとまった調査はなされず、謡本の保管、使用状況についての詳細は明らかになっていなかった。研究者は黒川に保管される謡本の種類と年代を辿り、変遷を明らかにした。黒川能の謡の本文の固定化には、昔ながらの伝承を保つ黒川能の姿を求める外部からの視線の影響が見られる。同時に、黒川内部における伝承形態や方法が変化する過程で謡の統一に対する希求が高まったことが、謡本の変遷に影響した。一方で、実際の伝承と記譜の間には「記されない」表現が見られることも指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、国指定重要無形民俗文化財である黒川能の謡本の状況と謡の伝承の一端が、所蔵状況などの数量的レベルで明らかになっただけでなく、実際の伝承のレベルから明らかになったことは意義があるものと考えられる。また、それらがどのような歴史的社会的背景のもとに生まれてきたのかということも、これまでの歴史研究における成果を活用しながら明らかにしたことも意義のあるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：It has been pointed out that chant books of the central Kanze and Hoshō schools have been used in Kurokawa Noh, but no comprehensive survey of chant books has been conducted since 1967, and the details of the storage and use of chant books have not been clarified. The researcher traced the types and ages of chant books stored at the Kurokawa and clarified their evolution. The fixation of the text of Kurokawa Noh chants can be seen to have been influenced by an external gaze that sought to preserve the traditional form of Kurokawa Noh transmission. At the same time, the desire for unification of chants increased as the forms and methods of transmission within Kurokawa changed, and this affected the evolution of chant books. On the other hand, it was noted that "unnoticed" expressions could be found between the actual tradition and the notation.

研究分野：音楽学

キーワード：黒川能 能 謡

1. 研究開始当初の背景

黒川能の謡本に関しては、横道萬理雄が中央の観世流や宝生流の謡本を朱で訂正して用いている(横道萬理雄編(1967)『黒川能』平凡社)ことを明らかにしているが、横道以降、謡本に関するまとまった調査はなされず、謡本の保管状況、使用状況についての詳細は明らかになっていなかった。研究者が、黒川での調査を開始した2003年当時、観世流や宝生流の版本はほぼ使用されず、黒川独自に作成された謡本が使われていた。観世流や宝生流といった中央五流で出版された版本が手軽に手に入る状況であるにも関わらず、独自の謡本を作成するに至った背景には、黒川独自の謡の発展や謡い方、演出が背景にあるものと考えた。

2. 研究の目的

黒川能の役者宅に保管されている謡本の種類と年代をたどり、黒川における謡本の変遷を明らかにする。そして、観世流や宝生流の本を朱で訂正して用いたり、黒川独自の謡本が作成された背景に、どのような謡やフシ付けの異同が見られるのかを明らかにする。そして、そうした異同が生まれた理由を、黒川能が置かれてきた歴史的・社会的背景から明らかにする。

3. 研究の方法

上座の現役の役者宅に保管されている謡本および昭和40年代以降に製作された、黒川能謡本を調査の対象とした。特に、特定の役者の家については、謡本全ページのスキャンと目録の作成を行ない、併せて、謡本の保管環境の整備も実施した。

次に、黒川能の伝承活動が盛んになっていく元禄期以降における上覧能や開帳能、天覧能、王祇祭といった機会に演じられた曲目を一覧にし、上演可能曲の変遷を明らかにした。それを参照しながら、黒川における曲の摂取が古いと考えられるものから、謡の異同の状況とフシ付けの違いを明らかにした。

4. 研究成果

黒川能の役者宅に所蔵される謡本は、自身あるいは師匠による手書きのもの、版本、黒川内部で作成されたものの3種類に分けられる。これまでの先行研究では、黒川には観世流や宝生流、進藤流の版本が多く保管されているとされてきたが、より詳細に状況を確認すると役者宅に保管される謡本の種類は、役者の家の履歴によってかなりの違いがみられることがわかった。その理由は、婚姻や分家などによる人の移動に伴って、謡本が移動したためと考えられる。

その中でも、版本には、進藤流という現在は廃絶した脇方の流儀による謡本と江戸期に出版された観世流の謡本、および黒川能謡本と呼ばれる平成時代に整備された謡本がある。進藤流の謡本は、貞享元年の高橋清兵衛版による謡本が複数の役者宅で確認できている。観世流の謡本は複数の出版年のものが確認でき、最も古いものだと元禄8年(1695)年5月山本長兵衛版の外組の百番本が確認できる。そのほか正徳6年出版のものも確認された。いずれも江戸期に出版されたものであるが、同時期、藩から城内での演能を依頼された際に10番程度しか演じることができないと返答した元禄3年までの衰退期を境にし

て、その後開帳能や上覧能といった機会を設けながら、伝承活動の活発化へと転換を図っていた時期と重なる。こうした活動の活発化は黒川への謡本の流入を促した可能性が考えられる。

謡の異同を分析したところ、大きな異同が認められるものと、多少の異同が認められるものに分けられた。大きな異同が見られる曲の1つには「羅生門」が挙げられる。「羅生門」は現行の五流の謡と大きな異同が認められる。観世流の謡本は、元禄期を境に現行に近いものへと変化を遂げていくが、黒川には観世流の本文が変化していく以前の本文が伝わっている。元禄期、黒川能は庄内藩城内で初の演能をしている。それ以前、黒川能の伝承の状況はかなり困窮していたが、この元禄期の上覧能は「元禄期以降の黒川の人々に、黒川能が庄内藩の能楽であるという認識をもたらした」と重田が指摘する通り（重田みち（2019）「黒川能と鶴岡荘内神社：明治維新後に引き継がれる酒井家への勤仕（東アジア古典演劇の伝統と近代；伝承）、『アジア遊学』232、pp.38-51」黒川能の伝承形態が強固なものとなっていききっかけとなった。以降、黒川能は藩での上覧能の都度に装束や道具類などの褒美をもらい、それに合わせるように、黒川能は曲目を大幅に増やしていった。その演目の拡大には、鶴岡や酒田で行なった開帳能の開催も大きな影響力を持っていたと考えられる。ちなみに「羅生門」は元禄3年時には、上演可能曲に含まれていなかったが、享保13（1728）年の開帳能で初めて演じられた記録が残されており、元禄3年から享保13年までの約40年の期間に黒川側が何かしらの形で「羅生門」を習得したことが推測される。そして、この期間に、五流では「羅生門」の詞章は変化を遂げていくが、黒川では変化以前の形が習得され、それが現在にまで続いているのである。

藩との関わりを深めながら伝承活動を拡大していった黒川能に対して、文化4年（1807）の上覧能の後に本来の演じ方を守り、新しい演じ方を採用してはならぬという命令が家老から出されていたことが知られている。黒川能に対する「黒川能はかくあるべき」という藩からの視線の中で、黒川に伝わる謡の本文は固定化の道を辿ったのかもしれない。

黒川と五流との節付けの差異の分析は、今後も引き続きの課題としたいが、観世流の現行の謡本には記譜があり、また黒川でも同様の節として謡われているのに、黒川能の謡本には記譜自体がないような場合がある事が明らかになった。すなわち、黒川では、五流と異なる独自の記号を用いたり、謡い方も五流のそれとは異なるが、節そのものは五流（ここでは観世流）と大きな差は認められないことが明らかになった。また、実際の謡い方の通りに正確に記された部分がある一方で、謡い手の記憶に依っている部分の両者があり、謡本の節付けに関しては、伝承者たちは大まかな指示を好む傾向にある。この分析が黒川全体の謡に当てはめて言えることなのか、また現行の黒川能の節がどのような歴史的背景のもとに形作られてきたものなのかということについては、今後更に検討を重ねていきたい。以上のようなおおらかなフシ付けとその解釈により、黒川には人や地区による謡の謡い方に様々な差があったことは想像に難くない。

昔ながらの伝承を保つ黒川能の姿を求める視線は藩から注がれる視線に限定されず、その後も現在に至るまで黒川外から注がれてきた視線の在り方とも一致する。また一方で、黒川内部においても、伝承形態や方法の変遷の中で謡の統一に対する希求は現代に近づくにつれて高まりを見せて行った。黒川能の謡は、そのような内外のバランスの中で揺れ動きながら伝承を保ってきたものなのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 外崎 純一, 阿部 武史, 垣東 敏博, 柴田 真希ほか4名
2. 発表標題 各地の会員をつなぐー民俗芸能と研究の現況「民俗芸能をつなぐ / 民俗芸能研究をつなぐ」
3. 学会等名 令和2年度 民俗芸能学会オンライン大会フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴田 真希
2. 発表標題 伝承者にとっての保存-黒川能を事例として-
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会、文化資源学会合同支部会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 Maki Shibata
2. 発表標題 Research on the way to reconstruct interest in the traditional festival of Kurokawa Noh
3. 学会等名 The 4th international symposium of the ICTM study group on MEA
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 柴田 真希
2. 発表標題 能の古態としての黒川能-昭和11年の黒川能の東京公演 に関する資料の考察を通して
3. 学会等名 第65回 日本音楽学会全国大会
4. 発表年 2014年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------